

要旨

[研究目的]

発達障害児に関する支援の課題として生涯にわたる支援体制づくりが求められているが、保健師の支援は子どもの就学を機に途絶えることが多く、保護者が困難を感じる事が指摘されている。そこで、発達障害児を育てることが母親にとってどのような経験なのかを明らかにし、就学移行期に焦点を当てて保健師としての支援方策について示唆を得ることを目的として本研究を行った。

[研究方法]

研究デザインは質的記述的研究である。特別支援学級に通う7歳～9歳の発達障害児を育てる母親3名を対象に半構造的インタビューを用いてデータを収集し、分析した。

[結果・考察]

母親は【他の子どもと比べておかしい子どもを得体の知れない宇宙人と思う】とともに【発達障害や支援学級に対して周囲からの偏見があるのではないかという思い】を持っており、【発達障害児を育てる上での課題や苦勞】を感じながら子育てをしていた。その一方で、親として【子どもにニコニコ落ち着いて過ごしてほしい】という願いの下で【意思決定の際に親身なサポートを受けて安心】したり、【子どもの発達障害を前向きにとらえ子育てを楽しみ】と思っており、【発達障害に向き合う一歩を踏み出しつつも発達障害であってほしくない気持ちに揺らぐ】経験をしていた。つまり発達障害児をもつ母親は、子どもや子育てに対するネガティブな思いを抱きながらも、周囲のサポートによる安心や子どもへの願い、子育てを楽しむ気持ちなどのポジティブな思いも抱くことで子育てを続けていた。さらにその経験は、障害の受容に関して子育て期全般にわたる揺らぎが加わることでポジティブな思いとネガティブな思いを行ったり来たりして常に揺らぎの中にあるものであった。

また就学移行期には母親は、子どもにとってどのような学校・学級が適切であるか悩み、障害や支援学級への偏見を気にしつつ様々なサポートに支えられて進学先を選択していた。一方で、就学後の支援に不満を抱き幼児期から学童期にかけて支援の切れ目を感じる経験もしていた。

[結論]

よりよい就学移行期支援に向けて、地域における保健・医療・福祉・教育の連携の強化と保健師の気づきと確かなアセスメントならびに信頼関係の構築と支援の継続という課題、さらに基礎教育での学びの必要性が示唆された。